

LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とボートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

#30 客船クルーズ 2

ノルウェイジャン・スター

世界三大クルーズ会社の一つノルウェイジャン・クルーズラインは、7万トンから17万トンクラスの客船17隻が世界中で運行している。先日ヴェネツィアから乗船したノルウェイジャン・スターは9.2万トン、14層からなるなかなか豪華な客船である。

クルーズ中の楽しみの一つである食事は6か所のダイニングが基本無料である。その他有料ダイニングが6か所と10か所のバーがある。日本人の味覚からすると決して大満足と言える料理ではないが、バリエーション豊かなので結構楽しめる。有料のレストランは一皿10ドル程度で安価だが、アルコールは全て有料である。

これらの有料ダイニングやバーで使用できるお得なプリペイドカードの事前購入が出来るのが後で分かった。プリペイドカードがあれば毎回サインする必要がないので楽である。チップはチェックアウト時にまとめて一定額を支払うシステムだから、毎回支払う面倒さがない。

客船クルーズと言うとディナーでの正装と言う堅苦しいイメージがあったが、最近では随分とカジュアルになっているようで、このノルウェイジャンでもスマートカジュアルでOK

だ。2,300人の乗客は殆どが欧米人だが、少数の香港、シンガポール、タイの人々も。1週間のクルーズの中、日本人には1組の夫婦しか出会う事はなかった。

キャビンは洗面所やシャワーが意外と広くストレスは全く無い。クルーズの航跡をモニターでいつでもチェック出来るのも旅を楽しくさせた。切り替えて船首モニターを見たり、映画も楽しめる。

毎日夜に翌日のスケジュールが部屋に配られるので、アレコレとチェックする楽しみもある。寄港地でのツアーと劇場でのレビューが充実していた。劇場での出し物は毎日変わるのだが、中でもパリのフォーリーヴェルジュール風とラスベガススタイルの歌ありダンスありのレビューがなかなか本格的で大いに楽しめた。船内で超スタイルのいい美人に出会う事が時々あるのだが、間違いなくレビューの踊り手なのだったと思った。

ドヴロウニクからコトルへ

嵐に見舞われたドヴロウニクを出港し、翌早朝目覚めるとヨーロッパ最南のフィヨルドと呼ばれる美しいコトル湾に入っていくところだった。左へ右へとフィヨルドを縫うように進むと、眼前に迫る巨大な岩山に張り付くように真っ白な漆喰に薄茶の屋根の家々が連なって

いる。数々のプライベートなメガヨットや客船が湾を行き交ったり係留している。ここはまるで別世界?と思える程の美しさに、しばし12階のデッキから身を乗り出す様にして眺めているうちに沖合でアンカーが打たれた。

フロントでテンドーチケットを貰い、次々と降ろされるテンドーが客船と港を頻りに行き交う様子を見ながら順番を待ち、30分程してテンドーに乗り込む。到着したコトルの客船ターミナルは降船した乗客でごった返していた。多くのツアーバスが待機していて次々と出発する。僕はというと、コトル湾沿を半周する2時間程のツアーに参加した。ローマ時代のモザイクの床が鮮明に残っている遺跡などを見学し、風光明媚なコトル湾の美しさに感激一入だった。

モンテネグロのコトルは元々ローマの属州だったが、中世にはヴェネツィアの統治下にあったといい、旧市街の入口の城壁にはヴェネツィアの紋章のライオン像を見る事ができた。世界遺産の街は小道が入り組み、石灰岩を切り出した白く趣のある外壁が連なる様は、まるで中世にタイムトリップした様な感覚に襲われた。

アテネからスプリト、ヴェネチアへ

アテネを夕方出航し地中海の島々を交わしながら進路を真北に向け、イオニア海からイタ



ヨーロッパ最南のフィヨルドに位置するコトルは、石灰石の岩山に囲まれた美しい街だった。湾内に係留してテンドーで上陸した。毎日変わるシアターでのレビューはなかなか本格的。各種イベントやプログラムも充実している。地中海のハリケーン「メディケーン」に遭遇も、10万トン近い客船は全く不安はなかったが、40フィートのセイリングヨットはさすがに耐えきれず大波に翻弄されていた。

リア半島東の付け根辺りからアドリア海に入ろうする寸前の事だった。夜間の航行は毎日のように強風が荒れ狂っていて、デッキに出られない時もあったのだが、この時は風雨も頂点に達した。さすがに大きく揺れるという事はないが、微かな振動で天井のシャンデリアが揺れを表現していた。すると船内のスピーカーから「遭難ヨットを救助の為、船をUターンさせます。海難法に基づいての行動なので了承ください」とアナウンスが流れた。キャビンに戻りTVモニターを見ると、確かに巨大な客船はUターンしている。

1時間もするとデッキに人が集まり始め、暫くすると右舷に大波に翻弄されるヨットが目に入ってきた。イタリアの国旗を掲げ、メインセーラーは引きちぎられて海面を引きずっている。マストは海面と接触するのではないかと思うくらいに左右に大きく揺れている。アナウンスによると、男性一人のヨットマンは船を放棄せず、イタリア沿岸警備艇の到着を待つとの事で、

ヨットを右舷に見ながら2時間ほど待機した。救助艇が到着すると再びUターンして、一路クロアチアのスプリト (Split) へ向かった。

翌朝広大なスプリトの港に入ると多くのクルーズ船の出入で混み合っていた。世界遺産の街へは、係留されている多くの大型木造船を眺めながら歩ける距離である。街はギリシャ、ローマから続く歴史を刻み、その後ヴェネツィアやオーストリア-ハンガリー帝国に組み入れられたりした後、ユーゴスラビアの一員となる。当時は海軍の母港だったというが、現在では温暖な地中海性気候と相まって、ボートショーを開催したり観光地としても大いに発展している。街の中心のローマ皇帝ディオクテティアノスの引退後の宮殿を見学した。今なお当時の面影を大いに残している。

スプリトの後、朝焼けに染まるヴェネチアに帰港した。ヴェネチアに降り立った翌日のニュースを見ると、僕が入港した同日午後、ヴェネチアに入港する客船を無数の小さな船

が取り囲み航行を阻止し、沿岸警備艇が小型船に放水する様子が放映されていた。この抵抗は最近頻繁になっているという。

地中海ではごく稀にハリケーンが発生し、これをメディケーン(地中海のハリケーンの意)というのだそうで、ノルウェイジャン・スターが遭遇したのは、まさにこれだった。地中海にはシロッコと呼ばれるアフリカからの強風が吹き荒れる事も多々あるようで、実際にイタリアから帰国してすぐ、イタリア中北部にシロッコが吹き荒れて幾つかのマリーナに甚大な被害をもたらした。ヴェネチアも1.5mもの高さまで街が浸水したという。地中海は穏やかな海というイメージがあるが、いやいや決してあなどれない海ではある。 **P.B.**

Profile

伊藤英一

事業家。ボート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に触れることを至上の喜びとしている。RIVA と RIB の熱烈な愛好家。